

第2章

障害者スポーツ選手のキャリア調査

本プロジェクトでは2013年にパラリンピアン、2015年にジャパンパラ（陸上競技と水泳）参加選手のアンケートによるキャリア調査を行った。パラリンピアン調査では中途障害者が7割を超えていたこと、これらの選手が受傷後スポーツを始めるまでに平均で10年以上かかっていたこと、練習は週4～5回実施している人が約4割と多く、公共の一般スポーツ施設で練習している人が約3割と多いこと、スポーツ実施にあたっては友人やトップ選手、監督やコーチの影響を受けている人が多いことなどが明らかになった。

ジャパンパラ参加選手に対するアンケート調査では先天的な障害者が52.3%と多く、スポーツを始めたきっかけとしては父母等を中心とした家族のすすめが3割以上と多かったこと、指導者の指導を受ける頻度は週に4～5回とする人が約2割と多かったこと、後天的な障害者で受傷後スポーツを始めるに際して受傷前のスポーツ経験がプラスに影響したという人が85.2%であったことなどが明らかになった。

これらの調査により、障害のあるスポーツ選手のキャリアの全体的な傾向を知ることができた。しかしながら一人ひとりの選手は年齢、性別はもとより、障害の種類や重さ、受傷時期、学校時代の体育の受講実態、時代的背景も様々でまさに多様な存在であり、どのような支援や施策があれば障害のある人のスポーツ実施に結びつくか具体的に示すのが難しいという課題があった。

そこで今年度は選手一人ひとりのこれまでの個人史、スポーツキャリアを面接調査により明らかにし、どのような環境、支援、制度、時代背景の中でスポーツを実施するようになったかを明らかにした。今年度は9名の選手にご協力をいただき、2019年3月から10月の期間に実施した。インタビュー時間はそれぞれ1時間30分程度であった。インタビュー実施場所は選手の都合を聞き面接可能な静かな部屋で行った。面接の最初に調査の目的、個人情報管理、調査参加が任意であり、途中でやめてもよく、その場合も何ら不利益が生じないことなどを説明し、同意の署名をしていただいたのちに実施した。

協力いただいた選手はいずれも男性で、先天的障害者2名、後天的障害者7名、全員肢体不自由であり、障害の要因は脊髄損傷、切断、骨形成不全などであった。年齢は21歳～62歳までで(平均44.4歳)あった。

調査はあらかじめ決めておいた質問項目に自由に答えてもらう半構造化インタビューによる。質問内容は基本的属性に関するもの、成績など競技に関する基本情報、障害発生からスポーツを開始するまでの経緯、スポーツ実施に影響した社会的状況、受傷前のスポーツ経験が受傷後のスポーツ経験に与えた影響、障害者スポーツ継続実施に関

する情報、スポーツの継続実施の社会的状況、今後の見通しなどである。

なお、本調査は日本福祉大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会の承認(申請番号 18-11)を受けて実施した。また調査は日本福祉大学スポーツ科学部の安藤佳代子助教と兒玉友助教の協力を得て実施した。

調査の結果から言えることは第一に、スポーツを始めるに際しては何らかの方法により障害者スポーツに関する情報を得ることができているということである。家族(親や配偶者)が障害者スポーツ関係者あるいはスポーツ関係者から障害者スポーツに関する情報を得ており、選手に情報を提供することが可能であったり、病院やリハビリテーション施設に障害者スポーツの情報を持っている医師、理学療法士や指導スタッフがいてそこから情報が得られたり、義肢装具士が障害者スポーツの情報を持っており、そこから情報を得られたりなどである。つまり、障害のある人に実際に対峙する身近で信頼できる人が障害者スポーツに関する情報を提供できる環境にあったということである。

2つめにその情報提供者は単に障害者スポーツの存在を知らせてだけでなく、そのスポーツを実施できる場所へのつなぎまで行っているという点である。情報提供者がリハビリテーション施設のスタッフなど、スポーツが実施できる場所のスタッフであれば、即時的にスポーツ実施につなげることができる。そうでない場合、情報提供者等がその競技をしている場所の情報もあわせ持っており、当該障害者を実施場所につなぐことでスポーツ実施が可能となると考えられる。もちろん当事者が自分で実施場所を探し、自らそこにつながるという場合も考えられる。

3つめにロールモデルの存在である。今回の調査からは2つのタイプのロールモデルが考えられる。1つはトップ選手やメディアを通じて配信されている情報(例えば漫画『リアル』など)である。これらにより、障害者スポーツや具体的な競技の存在を知り、スポーツをするイメージを描く契機となるものである。もう1つは、スポーツを実施している場所に同じような障害を持っている人がおり、その人が競技をやっているところを見て、自分がスポーツをやっている姿をイメージする場合である。スポーツ実施のイメージだけではなく、障害や健康に関わること、スポーツ実施のメリットやデメリットなどそれに関わる様々な情報も同時にもたらされていると考えられる。これらによりスポーツ実施の不安が解消され実施に向かうものと推察される。

4つめはスポーツ実施場所までの移動を可能とする要件が満たされていることである。スポーツ実施場所に支援を受けることなく移動できる場合は問題ないが、何らかの理由により移動を自律的に行うことが困難な場合はその支援が確保されていることが必要である。

5つめに、中途障害者の場合、受傷前のスポーツ経験の有無がスポーツ実施にプラスに影響している場合が多いということである。受傷前と同じ競技を行うかどうかは別として受傷前にスポーツ経験がある場合、スポーツ実施に対するハードルが低かったり、受傷前の仲間や指導者から障害者スポーツに関する情報を得たり、スポーツ実施に向けての精神的支援を受けること等が考えられる。

最後に、2020 東京パラリンピックの開催が多くの選手に影響を与えていることが明らかである。大会開催決定後に設けられた国や自治体の強化費を受けたり、目標となる大会として位置付けていたり、発掘事業に参加したり、それによって競技を変えたり、アスナビによるアスリート就職をしたり、競技協会強化担当として活動したりなどである。

(藤田紀昭)

仮名 Aさん

インタビュー実施日時 場所 2019年3月15日 10:00-11:30 ヤマハ発動機スポーツ振興財団

インタビュー対応者 日本福祉大学スポーツ科学部 藤田紀昭 安藤佳代子 兒玉友

個人基本情報	居住 東海地区 生年月日 1967年 性別 男 障害発生年齢 24歳 障害内容 頸髄損傷 リハビリ期間 5年
略歴	事故前 サラリーマン 1996年に結婚 2000年に子どもが生まれた。 現在、東京の会社に東海地区で在宅勤務。妻は看護師。
競技基本情報	競技 ツインバスケット、水泳(2010、2013 全スポ出場、2018 アジアパラ出場、背泳ぎ、自由形) 陸上(2015年～) クラス分け S2(水泳)、T51(陸上) 競技成績 アジアパラ、ジャパンパラ、日本選手権出場、日本記録保持者 競技開始年齢 ツインバスケット 27歳 水泳 37歳 県強化指定選手 陸上(47歳～)
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯①：カートレース中の事故により頸髄損傷となった。事故後の手術時、リハビリ期間中にトラブルがあり療養・リハビリ期間が延びた。東海地区の病院→関東の病院→東海地区障害者リハビリセンター→国立リハビリテーションセンター リハビリ期間中の心の支えは東海地区病院看護師(のちに結婚)。病院を変わっても連絡取り合う。筋力はほとんどない状態。最初にやったのはツインバスケット。1999年まで実施したが、妻の妊娠がわかったこと(妻が帯同できなくなった)、褥瘡ができたこと、バスケのセンスがないと思ったことなどでいったん休止。 経緯②：スポーツを休止したことで病気をすることが多くなった。居住地近くに新しいスポーツ施設ができることになり、その立ち上げ時にバリアフリー等に関して意見を言った。それもあってスポーツ施設はバリアフリー。そのスポーツ施設にはプールがあった。2004年、パラリンピアン講演、実演を見て自分もやれそうと思った。水泳は子どもの頃から好きだった。そのパラリンピアン指導者がたまたま居住地近くにいることがわかり教えを乞うたが、障害が重いため最初断られた。が、結局指導してもらえることに。パラリンピアン影響もあり、自分としては最初から競技をしようと思って始めた。しかし気持ちとは裏腹に最初は浮くのがやっとで苦労した。それでも翌年大会に出場。

	<p>陸上競技は 2015 年から。東海地区障害者リハビリセンターで知り合った指導者にアドバイスをもらい始めた。陸上を始めてから水泳の記録も伸びるようになった。</p> <p>始めた場所：①東海地区障害者センター。それまで障害者スポーツは考えたことがなかったが、東海地区障害者センターで多様なスポーツを経験。その中にツインバスケットのプログラムがあった。怪我をしてから 4 年目で始めた。そこにはツインバスケットのクラブもあり、入部した。仲間と一緒にやるのが楽しくツインバスケットを選んだ。いわゆるリハビリテーションセンターでスポーツを始めた。この施設がなければ普通の病院ではスポーツを体験できないと思う。その後国リハでもツインバスケットをした (K 先生)。</p> <p>始めた場所：②居住地近くのスポーツセンタープール。そこで障害者水泳指導者に教えてもらった。</p> <p>重要な他者：①ツインバスケットを教えてくれたのは東海地区障害者リハビリセンターのスポーツ指導員。</p> <p>重要な他者：②妻、パラリンピアン水泳選手、障害者水泳指導者、東海地区リハビリテーションセンターで知り合った指導員。</p>
<p>障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>① 1953 年から 2013 年 3 月までであった東海地区リハビリテーションセンター→スポーツとの出会い。この機関で十分なりハビリ期間をとれたことが大きい。また妻の介助がなくてはスポーツができなかったことから妻の存在が非常に大きい。</p> <p>② パラリンピック水泳金メダリストの講演がきっかけとなっており、パラリンピックの存在、パラリンピアン活動の影響している。陸上開始にあたっては東海地区リハビリテーションセンターで知り合った指導者の存在も大きい。</p>
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭環境もあり、子どもの頃から水泳は好きだった。 ・中学校、高校でソフトテニス。 ・水泳が好きだったことが影響している。好きでなければきっかけとなった講演も聞きに行っていない。 ・受傷前にカートをやっていてタイムを縮めることに対する姿勢等が影響。
<p>障害者スポー</p>	<p>継続状況：②現在、週に 2 回練習。妻が介護可能な公休日などに実施。</p>

<p>ツ継続に関する状況</p>	<p>金銭的には助成があり国内の試合に出る程度であれば何とか継続できる。外出支援のヘルパーを申請したことがあるが当該市では認められなかった。介助してくれる人がいなければスポーツを続けることは難しい。プールの入退水はプールのスタッフにも手伝ってもらう。プールによっては手伝ってもらえないところもある。仕事はフレキシブルにやれるので競技をするのに影響はない。陸上競技 車いすマラソンをやっている。主な実施場所：①リハビリテーションセンター ②居住地近くのプール 重要な他者：①スポーツ実施時に帯同してくれる妻 ②練習時介護してくれる妻、子どもも手伝ってくれる。障害者水泳チーム(入退水時のサポート)</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>② 居住地近くにバリアフリー化されているプールがあること。そのため家族の介助も受けやすい。バリアフリー化には自らスポーツ施設の設置の委員となり意見を言えたことも影響している。 ② 県指定強化選手、県から助成をもらっている。県障水協、県水連の強化指定選手。パラリンピック日本開催が決定して以降各都道府県で強化選手への助成が始まっている。パラリンピック国内開催が選手のスポーツ継続に好影響を与えている。自ら制度の不備を指摘する等主体的に関わっていることも大きい。</p>
<p>今後のスポーツ実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・生涯現役として水泳を続けていきたい(本人)。 ・スポーツをしていてくれた方が健康にもいいので続けてほしい(妻)。
<p>まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・リハビリテーションセンターでスポーツを始めた。この施設がなければ普通の病院ではスポーツを体験できなかった。 ・受傷後ほぼ寝たきりだったのでリハビリ期間が長くとれないとスポーツはできなかった。 ・家族(妻)のサポートが難しくなったことでいったんスポーツを休止。 ・パラリンピアン講演・実演をきっかけに水泳を始める。そこにはバリアフリーのプール、障害者水泳指導者の存在があった。 ・2013年にパラリンピック開催決定後の助成制度がスポーツ継続に好影響。 ・スポーツ開始、継続とも家族とりわけ妻が介助、支援等できることが大きい。

(藤田紀昭)

仮名 Bさん

インタビュー実施日時 場所 2019年3月15日 13:30-15:00 県福社会館
 インタビュー対応者 日本福祉大学スポーツ科学部 藤田紀昭 安藤佳代子 兒玉友

個人基本情報	<p>居住 東海地区 生年月日 1978年 性別 男</p> <p>障害発生年齢 15歳(中学3年) 障害内容 単下肢切断 リハビリ期間</p>
略歴	<p>高校入学後病気のためすぐに中退。16歳から仕事を始め、その後現在まで同じ会社に勤め、現在取締役。</p>
競技基本情報	<p>競技 陸上競技100m クラス分け T64</p> <p>競技成績 ベスト記録 11秒94 2012年ロンドン大会出場(100m、リレー)</p> <p>競技開始年齢 25歳</p>
障害発生から障害者スポーツ開始まで	<p>経緯：15歳で骨肉腫を発症、手術により左下肢を切断。その後3年間(18歳まで)は入退院を繰り返す。歩いたり、走ったりするためのリハビリすら受けなかった。18歳で郷里に帰ってきてからは義足がコンプレックスとなり、あまり積極的な活動はしなかった。切断してから10年後、25歳の時、義足の作り替えの時に担当となった同じ年齢の(2003年世界陸上と一緒にテレビで観た)義肢装具士(実習生:義足陸上競技クラブの手伝いもしていた)に誘われ、陸上競技を始めた。義足の陸上競技クラブに入り10年間、週末を中心にそこに通う。クラブに入り、メンバーと接する中で義足へのコンプレックスがなくなっていった。25歳まで始められなかったのは障害者スポーツに関する「情報」を何も知らなかったから。</p> <p>始めた場所：東京都総合障害者スポーツセンター、地元のスポーツ施設 重要な他者：義肢装具士、陸上競技クラブメンバー、2003年世界陸上、陸上競技を始めるまでは親、兄弟や友人が支えてくれた。仕事をやっていたことで病気のことを忘れる時間が持てた。</p>
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>受傷後陸上競技を始めるに際しては、陸上競技に詳しく、義足の陸上競技クラブを手伝っている義肢装具士がいたこと、義足の陸上競技クラブがあったこと、義足の発展があり、陸上競技ができるような義足が存在していたことなどが大きい。</p> <p>義足の陸上競技クラブが障害者スポーツセンターで練習していたことか</p>

	<p>ら、障害者スポーツセンターの存在も影響している。</p> <p>2018,2019 年は県から強化指定ということで助成金が出ている。</p>
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<p>幼稚園からずっとスポーツをやっていた。小中と陸上競技(短距離、跳躍)、アイスホッケー、スキー、ソフトテニス、中2でインラインスケートこれらは父親の影響で始めた。父親がそうした環境を与えてくれた。こうした経験が受傷後、陸上競技を始めるときにはプラスに作用している。</p>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>継続状況：スポーツを始めてから心身ともに強くなった。メンタルも強くなったし、筋力もアップし、きれいな歩行ができ、転ばないようにもなった。スポーツをやるとプラスのことが多い。平日は5時、6時まで仕事をやり、その後練習やマッサージや鍼灸を受け毎日帰りは10時半とか11時。</p> <p>プロになるということも考えたが、年齢のことやセカンドキャリアのことを考え、今の生活となっている。現在、障害者の大会にも出るが地方の一般の大会や記録会などにも出ている。6～7年前にはそうした大会に障害が理由で出られないこともあった。以前は国内大会で勝てれば十分と思っていたが、北京パラリンピックのステージに立っている仲間を見て自分もあそこまで行きたいと思うようになった。現在、S というオリンピックの方などもいるクラブに所属している。そこで様々なことを教えてもらっている。</p> <p>現在年間40～50校で授業をやっている。お話をして義足を触ってもらったりというような。</p> <p>主な実施場所：居住地近くの車で5分から10分のところにある陸上競技場。</p> <p>重要な他者：始めるとき影響を受けた同じ義肢装具士。同じ陸上競技を第一線でやっている仲間同士、刺激し合ったり、高め合ったり、情報交換してきた。また、妻がマッサージをしてくれたりして支援してくれた。</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>同じように義足で第一線で活躍している陸上競技選手がいることが刺激となっている。</p> <p>4年ごとの周期でパラがくるのが大きい。S というクラブに所属していることもそうだし、現在動作分析など JIS 関係者がしてくれている。</p>

今後のスポーツ実施	<p>第一線で活動するというのは2020年までだが、健常者の記録にどれだけ障害者が近づけるかということが自分の目標となっているところもあるので、特に引退とかは考えていない。</p> <p>まだまだ障害者スポーツは認知度も低いので自分が関わっていることで若い人が続いてくれればよいと考えている。そういう環境を作っていくのが自分の仕事かもしれない。若い人たちが不自由なくスポーツできるのがいいと感じている。</p>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・受傷後、陸上競技を始めるにあたって影響を与えたものとして、義肢装具士、義足の陸上競技クラブ、障害者スポーツセンターの存在がある、陸上競技で使えるスポーツ用義足の発展などがある。とりわけ、義肢装具士と義足の陸上競技クラブの存在は大きい。 ・受傷後スポーツを始めるまでに10年の期間を擁しているが、障害者スポーツに関する情報がなかったことが影響している。 ・パラリンピック出場経験があるトップレベルの選手であり、スポーツ継続の要因として同じように義足を利用して陸上競技を行っている選手の存在が影響していた。 ・2020大会開催決定後は金銭的な補助やオリンピックのいる陸上競技クラブに所属する等の影響が見られる。 ・受傷前のスポーツ経験は受傷後スポーツを始める際にはプラスに作用していた。

(藤田紀昭)

仮名 Cさん

インタビュー実施日時 場所 2019年8月19日13:00-14:30 県福社会館

インタビュー対応者 日本福祉大学スポーツ科学部 藤田紀昭 安藤佳代子

個人基本情報	居住 東海地区 生年月日 1956年 性別 男 障害発生年齢 25歳 障害内容 脊髄損傷 リハビリ期間 2年程度
略歴	事故前 サラリーマン (労災) 現在、車いすメーカーを定年退職し、そのままアルバイトで居住地エリアを主に担当している。
競技基本情報	競技 車いすバスケットボール、パラアイスホッケー約20年 クラス分け 車いすバスケットボール2.5 競技成績 2002年ソルトレークシティー大会5位、2006年トリノ大会5位、2010年バンクーバー大会銀メダル、2018年平昌大会出場 競技開始年齢 25歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯：①通勤時の事故により脊髄損傷となった。受傷後、箱根国立療養所に1年半～2年入所。そこで、車いすバスケットボールを始める。その他、卓球、水泳なども経験した。その後、長野県の労災作業所に移動し、長野の車いすバスケットボールチームに入り本格的に競技を行った。5年ぐらい朝昼晩と練習を行っていたため、やりすぎで股関節を痛めてしまい、車いすバスケットボールは辞めることに。そして、結婚を機に現居住地へ。 経緯：②1998年長野大会の2年くらい前に、選手発掘事業に参加し、パラアイスホッケーを始める。サッカーのゴールキーパーの経験から、パラアイスホッケーのゴールキーパーを勧められたことがきっかけ。初めは東京チームで練習を行っていたが、長野チームのキーパーが空いたので長野チームに所属を変更して練習を行った。長野大会は出場が叶わなかったが、それ以降の4大会は出場した。練習は静岡から長野へ片道3時間かけて週末に通っていた。トリノ前には、シカゴに月1回指導を受けに行っていたことも。 始めた場所：①箱根国立療養所 (指導員のK先生) →長野チーム練習場 始めた場所：②発掘事業→東京チーム→長野チームの練習場 重要な他者：①箱根国立療養所のK先生 重要な他者：②選手同士、当時のコーチ・監督

<p>障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>① 箱根国立療養所にて K 先生から、車いすバスケットボールをやるようにレールをひかれた。周りが同じ障害の人ばかりだったので、その時にいろいろと覚えることができた。</p> <p>② 1998 年長野大会が決まり、もう一度挑戦したいと思った。</p>
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・サッカー少年で、就職してからも楽しみでサッカーを行っていた。 ・サッカー以外にも、社会人になって野球、ソフトボール、サーフィンなどを経験。 ・サッカーのゴールキーパーをしていた経験が、パラアイスホッケーのゴールキーパーにつながった。 ・チームスポーツを選択したのも、受傷前のスポーツが影響。
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>継続状況：</p> <p>① 運動が好きであること。</p> <p>② 毎週末（土曜日）に長野へ練習に通っていた。パラアイスホッケーは練習時間が早朝か夜中（朝 5 時や 6 時など）で若い方が継続するのが難しい時間帯にしか練習ができない。</p> <p>主な実施場所：②やまびこスケートの森アイスアリーナ（パラアイスホッケー強化拠点施設）</p> <p>重要な他者：妻、選手仲間、コーチ・監督</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・途中からはパラアイスホッケーをなくしたくないという使命感のような感じで継続していた。協会の存続、種目がなくなってしまうのではないかという危機感から勝たないといけないという使命感が生まれていた。 ・金銭的な部分は協会からはサポートを受けてなく、自腹で遠征に行っていた。会社の理解があり、仕事もきっちり行っていたので、休みをとることも問題なく参加できていた。 ・労災であったことも継続する上での金銭的な部分は大きかった。 ・JPC のアスリート支援を 1 回受けたことがある。 ・国際大会に出場したら支援してもらえるが、普段の練習の交通費などを面倒みてもらいたいと思っていた。 ・若手が育ちにくいのは、意外とお金がかかる種目（ポジション）だから。

今後のスポーツ実施	<ul style="list-style-type: none"> ・現在、強化指定選手になっているが申し訳ない。 ・4年ごとに辞めると言っているが、継いでくれる若手がなかなかいないので、結局残ってしまう。 ・コーチは目指していない。 ・次世代の育成・普及に関われたらと考えている。名古屋チームが設立されるから何か応援してあげたいと思っている。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・箱根国立療養所で指導員に声を掛けられて車いすバスケットボールを始めた。そのきっかけをくれた指導者や周りの仲間がその後のスポーツ実施に大きく影響した。 ・車いすバスケットボールを練習しすぎて怪我をしてしまい、スポーツを中止することに。しかし、スポーツが好きであること、子ども時代からスポーツを行っていたことがプラスに作用し、長野大会の発掘をきっかけに他競技であるパラアイスホッケーを始める。 ・仕事と練習の両立を行いながら、練習や海外遠征などの費用は実費で対応していた。労災であったことも費用を準備する面で継続できる要因になった。 ・若手が育ちにくい競技環境もあり、平昌大会まで4大会を現役で出場。今後は若手育成や普及に関わりたい。

(安藤佳代子)

仮名 Dさん

インタビュー実施日時 場所 2019年8月19日 15:00-16:30 県福社会館

インタビュー対応者 日本福祉大学スポーツ科学部 藤田紀昭

個人基本情報	<p>居住 東海地区 生年月日 1996年 性別 男</p> <p>障害発生年齢 0歳 障害内容 骨形成不全症 リハビリ期間 ー</p>
略歴	<p>同じ障害のある兄弟がいた。小学校は普通学校の特別支援学級、中学校は普通学校の普通学級に介助員を一名つける形で在席した。介助員は教室移動やトイレ介助、他の生徒との衝突の防止など日常の身の回りのことを支援してくれた。高校は普通学校、普通学級に介助員等つけずに在籍した。高校卒業後、大学理学部に進学し、今年3月に卒業し、公務員となったが、障害者アスリートの就職支援をしているつなひろワールドを利用して転職し、アスリート雇用してもらっている。</p>
競技基本情報	<p>競技 卓球 クラス分け 車いすの部 クラス5</p> <p>競技成績 インタビュー時世界ランキング 30位台 18 アジアパラ上位入賞</p> <p>競技開始年齢 11歳(小学校6年)</p>
障害発生から障害者スポーツ開始まで	<p>経緯：体育の授業は同じ障害のある弟と2人に介助員1人が付き、その3人でボール投げやゴルフのようなことをやったりしていた。運動会などは走る距離を短くするなど配慮をして参加した。高校の体育はずっと見学だった。部活では卓球をやっていた。卓球は小学校6年から始めた。母親の友人に障害のあるお子さんがいる人がいて、そのお子さんが障害者卓球クラブに通っていた。それで母に勧められて弟と一緒にその卓球クラブで始めた。体を動かすこと自体は好きなので卓球をやることも抵抗はなかった。このクラブには現在も通っている。小学校6年の時に小学生大会の障害者の部に初めて出た。その後、中学、高校、大学と卓球部に入った。</p> <p>始めた場所：市総合福社会館の多目的ホールのような場所。</p> <p>重要な他者：母親、障害児を持つ母親の友人、障害者卓球クラブの会長(指導者)</p>
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会	<ul style="list-style-type: none"> ・通学していた小学校に肢体不自由の特別支援クラスができたのは自分が入学する時が初めて。親の働きかけなどがあったおかげ。 ・居住している市に障害者卓球クラブがあった。

<p>的状況・環境・条件</p>	<p>・高校は8階建てだったがエレベーターや障害者用トイレもあった。</p>
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<p>—</p>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>継続状況：中学校の時は障害のない生徒とともに卓球部に入った。接触のあるスポーツだと骨折のリスクがある。卓球なら安全だった。部活はしっかりした部で練習もしっかりできたことが今につながっている。顧問教諭は厳しい人だった。車いすだからと言って特別扱いするわけではなかった。この人は市の中体連の会長でもあり、中学校の大会に出ることができた。常に弟と一緒に切磋琢磨してきた。</p> <p>高校でも卓球部に入った。この頃から障害のない人の卓球との違いを理解し始めた。部活はそれほど厳しくなかったおかげで自由にできたので、弟と練習することが多くなった。中学校の時に障害者の卓球大会で車いす卓球の師匠と呼べる人と出会った。その後、月に一度近県にある障害者スポーツセンターに練習に行くようになった。</p> <p>大学時代は大学の体育館が他の部も利用しており骨折のリスクがあることから利用しにくい状況であったため、近隣の市のバリアフリー化された体育館で週5～6日弟と練習をした。大学1年の時に日本代表に選ばれ、初めて海外遠征に行った。2015年5月に弟が死去した。</p> <p>大学卒業後公務員となったが、仕事の関係で練習が週1、2回くらいしかできなくなった。また海外遠征等にも出にくい状況があった。そうしたことからアスナビとつなひろワールドを利用し2019年3月から現在の会社に転職、アスリート雇用してもらった。</p> <p>現在は障害者卓球協会のNT(上から2つ目のランク)として支援してもらっている。関東に行くとアスリート雇用してもらっている選手も多く、平日も時間調整して一緒に練習しやすい。</p> <p>障害の影響で骨折したり、ひびが入ったりということは多かった。</p> <p>主な実施場所：市総合福祉会館、中学校体育館、高校体育館、バリアフリー化された市立体育館(大学時代)、居住市の体育館、関東の障害者スポ</p>

	<p>ーツセンターなど</p> <p>重要な他者：弟、中学校の卓球部顧問、車いす卓球の師匠(A 県の在住)、練習相手としての父</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・普通学校(中学校)に行くことができ、中学校の部活動に卓球部があったこと。 ・バリアフリー化された校舎の高校があったこと、そこに卓球部があったこと。 ・大学生時代はバリアフリー化された体育館が近隣市にあったこと。 ・障害者アスリートもアスナビの対象となっていたこと。 ・アスリート雇用してくれる企業があったこと。 ・企業スポンサー(父親の会社)や県からの助成金がもらえること。 ・卓球用品メーカーから用具を提供してもらっている(中学2年から)。
<p>今後のスポーツ実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・2020が終わった後も現役を続けたい。 ・現在雇用してくれている会社も継続雇用してくれる予定。 ・これまでの経験を下の世代に伝えたい。そのためにももうしばらくは現役を続ける。 ・現役引退後は講演などを通じて経験を伝えたい。
<p>まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・卓球を始めるに際しては母親の友人に子どもが障害者卓球クラブに行っている人がいたこと、居住している市に障害者卓球クラブがあったことが影響。 ・中、高校と普通学校に行き卓球部があったことで卓球を継続できた。 ・中学校卓球部顧問、障害者卓球クラブ会長、車いす卓球の師匠、弟、父親などが卓球継続の重要な他者といえる。 ・現在卓球を中心とした生活ができるのはアスナビやつなひろワールドが障害者アスリートも対象としたこと、アスリート雇用してくれる企業があったこと、企業スポンサーがついていることなどの影響がある。 ・弟の死去が卓球にかける思いを強くしている。

(藤田紀昭)

仮名 Eさん

インタビュー実施日時 場所 2019年8月19日 17:00-18:30 県福社会館

インタビュー対応者 日本福祉大学スポーツ科学部 藤田紀昭 安藤佳代子

個人基本情報	居住 東海地区 生年月日 1976年 性別 男 障害発生年齢 0歳 障害内容 対麻痺 リハビリ期間
略歴	公務員（市職員） 2008年（30歳から現職勤務） 小学校から高校まで市内の普通学校に通う。小学生の時は杖なしで歩いていたが、成長に合わせてアキレス腱延長の手術や杖を使用する。病気が進行し車いすを使用するようになったのは5年くらい前から。
競技基本情報	競技 水泳（県スポ1回出場経験あり）、陸上競技、マラソン（2017年車いす駅伝出場、2018年-ジャパンパラ、関東パラ出場、2018年全スポ出場、大分国際車いすマラソン） クラス分け T34 競技成績 2019年関東パラ入賞、2019年ジャパンパラ入賞 競技開始年齢 40歳（2017年～）
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯：①子どもの頃行ったスポーツは、父親とのキャッチボールとスイミングスクール（3歳～6歳くらいまで）。野球は好きだったので良く観ていた。スイミングスクールはリハビリを兼ねていた感じで通っていた。小学校低学年の頃は一緒に体育の授業に参加していたが、それ以降小中高の体育の授業や運動会も見学だった。高校ではあえて運動会を休んだりすることも。中学では、体育がやろうと思ってもできない内容なのに成績が悪くつけられていて、他の科目が良くても平均がそれで下がってしまい納得いかなかった。 高校卒業後、5年間企業勤務。1996年くらい（20歳）から体力づくりのため水泳を始めた。その後、転職をして資格を取得するために専門学校（夜間）に行きながら5年くらい企業で働く。専門学校に通っている当時は、毎日の生活が忙しくスポーツどころではなかった。 経緯：②状態が悪くなってきて車いすを使用するようになって、車いす競技を始めた。2017年に国内クラス分けを受けた。東京パラが決まり、リオ大会を観たりして競技をいくつか考えたものの1つに陸上があった。発掘事業（草薙）に参加して、2ヶ月後の2017年車いす駅伝で急遽欠場があったところに入って借り物の車いすで出場したことがきっかけ

	<p>け。静岡で自転車開催が決まり、大会を観に行った際に、初めはパラサイクリングをやりたいと思った。しかし、なかなか競技者がいなく、デモ機も1台しかないということで選択できなかった。陸上は県内に選手がいたこと、練習も一緒にできることなどから選択した。レーサーは、既に引退されている方のものを借りて始めた。自分のレーサーは作ってまだ2年くらい。</p> <p>始めた場所：①地域のスイミングスクール 始めた場所：②発掘事業→車いす駅伝大会 重要な他者：①父親の知り合い（父親を通じて） 重要な他者：②家族や県内の陸上選手（佐藤友祈選手など県内出身選手の活躍）</p>
<p>障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>① 20歳くらいから水泳を始めたきっかけはリハビリ目的。父親の知り合いから水泳を誘われた。今も時々泳いでいる。</p> <p>② 公務員となり生活が安定、子どももある程度大きくなってきて、ゆとりができた。丁度、東京パラが決まり、リオ大会をテレビで見てスイッチが入った。競技人口が少ないとか、話を聞くと、「これはやらない」と思った。発掘事業が大きなきっかけとなった。練習や駅伝の見学の際、大先輩（60代以上）の選手がとても元気でスポーツを行っている様子を見て、生涯スポーツとして良いと思ったことも含まれる。これまであまり障害者の方と付き合いがなかった。健常者の中でのいう意識が強かったが、状態が悪くなってきたこともあり考え方も変化していった。</p>
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<p>スポーツはできなかったが、嫌いではなかった。やらなくても観に行くことが好きだった。学校時代はできなかったけれどもスポーツ自体には関心があった。普通学校に通っていたので、スポーツを実施する上では、特別支援学校の方が始めやすかもしれない（ノウハウがある）。実際に全スポに出場した際に特支教員が指導者やコーチとして多く参加していた。自分も特支に通っていたら、もっと早く競技を始めていたかもしれない。その問題としては、普通学校の先生が情報を知らないことが大きいのではないかと。</p>
<p>障害者スポーツ継続に関する</p>	<p>継続状況： ・生活が安定したことがスポーツを行う、継続できることの要因の1つ。</p>

<p>る状況</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・毎週末に練習か大会（仲間がいることが大きい）20km～30 kmロード。 ・自宅では、ダンベルで筋トレ、ローラーで練習をすることも。 ・週2回ジムで筋トレ <p>主な実施場所：②海沿いの堤防を練習に使用、トラック練習ができないのが問題。県パラ陸上協会が借りて押さえている日（月1）に練習。</p> <p>重要な他者：妻、子ども、選手仲間、監督、トレーナー</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・現在、自己ベストを更新しているので競技が楽しい。 ・競技者の体が変わっていくことが楽しい。 ・練習仲間がいることで継続できている。発掘でカヌーやパラサイクリングをやりたいと思ったが、1人で練習することは難しい。 ・監督やトレーナーのサポート。 ・競技を始めて同僚や友人からの激励。 ・競技会などで休む場合の職場の理解。 ・競技を始めたことにより周囲の障害者スポーツへの関心度の変化。
<p>今後のスポーツ実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・競技を継続して4年後出場を目指す。 ・仕事を辞めてまで競技に専念することはできないので、仕事と両立しながらどこまでできるか考えたい。 ・パラサイクリングのハンドサイクルを中古で提供を受けたので、パラトライアスロンも視野にいれている。来年くらいにはレースに出場したいが、海で泳ぐ水泳がプールとは違うので心配がある。もう1人仲間も購入した。
<p>まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・スポーツを本格的に行うことはあまりなかったが、スポーツを観ることは幼児期から好きで、スポーツが嫌いではなかった。 ・成長に伴い、杖や車いすを使用するようになった。 ・車いすを使用するようになったことで、車いす競技ができると考え始めた。 ・仕事が安定し、子どもが大きくなり生活面でのゆとりができたこと、東京パラが決まりリオパラの映像を観たことがきっかけとなり競技を始める。同じ時期に発掘事業があり、それに参加したことも大きかった。 ・競技を選考するのに、地域での練習環境・仲間がいることが重要とな

	<p>った。</p> <ul style="list-style-type: none">• 競技用具は引退選手のものを借りて始めた。初期費用が大きいことは始める際に大きな影響を与える。• 競技経験が浅いが、自己ベストを更新することや体の変化が楽しさとなっている。4年後を目指したい。
--	---

(安藤佳代子)

仮名 Fさん

インタビュー実施日時 場所 2019年8月14日 14:00-15:30 県総合福祉センター
インタビュー対応者 日本福祉大学スポーツ科学部 安藤佳代子 兒玉友

個人基本情報	居住 東海地区 生年月日 1976年 性別 男 障害発生年齢 28歳(2004年) 障害内容 脊髄損傷 リハビリ期間 6ヶ月
略歴	事故前 サラリーマン 工作中的事故により脊髄損傷 2001年に結婚 現在、東海地区で勤務(アスリート雇用ではないが練習が中心)。 妻はアスリートフードマイスター。
競技基本情報	競技 車いすバスケットボール(約1年)、車いすテニス(約5年)、車いすフェンシング(2018アジアパラ上位入賞) クラス分け B 競技成績 アジアパラで上位入賞 競技開始年齢 車いすバスケットボール 28歳～、車いすテニス 30歳～、車いすフェンシング 39歳～
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯：仕事で荷物を運んでいる際の事故により脊髄損傷となった。約半年で退院し、妻の勧めで車いすバスケットボールを始めた。車いすバスケットボールは1～2年続けたが、接触スポーツは自分には合わない判断し、他の車いすのスポーツを探し、車いすテニスを始めた。車いすテニスは楽しく、大阪まで足を運んで練習に励んだ。しかし、細かいクラス分けがない車いすテニスは、脊髄損傷では勝てないこと、2020東京大会が決定したことがきっかけとなり、他の車いすスポーツを探すこととした。妻の友人が国際車いすフェンシング協会の事務局長だったことから車いすフェンシングを勧められ始めた。 始めた場所：車いすバスケットボールは県総合福祉センター。車いすテニスは四日市市障害者体育センターで、その後、鈴鹿スポーツガーデンや県総合福祉センターでも練習した。車いすフェンシングは、地元高校や京都などで練習を行っている。 重要な他者：妻、妻の友人(国際車いすフェンシング協会関係者)。
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会	入院中は障害者スポーツのことは考えたことがなかったが、妻の勧めで始めた。事故前は、バレーボールをしていたため、妻はシッティングバレーボールを勧めようとしていたが、滋賀の日本代表選手から脊髄損傷

<p>的状況・環境・条件</p>	<p>の選手では日本代表を目指すことは難しいと言われ、他の種目を探した。一番に浮かんだのが、車いすバスケットボールを題材にした、漫画『リアル』であった。そのため、車いすバスケットボールを始めることとなった。その後、車いすテニスを始めたが、東京大会決定および妻の友人の勧めがきっかけとなり、車いすフェンシングを始めた。</p>
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの頃からスポーツが好き。 ・サッカー、陸上、バレーボールをしていた。 ・事故前はバレーボールの社会人チームに所属。 ・妻はスポーツマン好き。妻が行動力のある人だったことも影響している。
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>継続状況：現在、練習が中心の生活ができている。会社はアスリート雇用で入社したわけではないが、月に2、3回行く程度で良い。専門学校の外部講師をしている。</p> <p>主な実施場所：近くの高校や近隣の大学で練習、京都や東京で合宿等を行っている。</p> <p>重要な他者：妻、練習相手（一般の選手に車いすに乗ってもらう）</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>練習を行える場（近くの高校や近隣の大学）があったこと。</p> <p>フェンシングは大きな機材を床に置くが、これまで体育館の利用で断られたことはない。</p> <p>パラリンピック日本開催が決定したことで、会社側のサポートが得られた。</p>
<p>今後のスポーツ実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・東京 2020 パラリンピックで金メダルを獲得したいと考えている。 ・いつ引退するかは考えていないが、生涯、何らかのスポーツは続けていく。
<p>まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・妻の勧めでスポーツを始めた。通える場所に障害者スポーツを体験できる施設があった。 ・様々な障害者スポーツを体験したが、車いすフェンシングを始めた。きっかけは、2020 東京大会が決定したこと、妻の友人が国際車いすフェンシング協会関係者で車いすフェンシングを勧められたことであった。 ・妻のサポートをはじめ、練習を行える場があったこと、会社側のサポートがスポーツ継続に影響している。

	<ul style="list-style-type: none">・スポーツ開始、継続とも妻の勧めやサポート、環境が整っていることが大きい。
--	---

(兒玉友)

仮名 Gさん

インタビュー実施日時 場所 2019年9月9日 15:30-17:00 県総合福祉センター
 インタビュー対応者 日本福祉大学スポーツ科学部 児玉友 安藤佳代子

個人基本情報	居住 東海地区 生年月日 1969年 性別 男 障害発生年齢 28歳 障害内容 左膝関節機能全廃 リハビリ期間 約3ヶ月
略歴	小学生の頃は野球、中学・高校ではバレーボールをしていた。 23歳で結婚し、就職後も社会人チームでバレーボールを続けていたが、28歳の時に膝の腫瘍が原因で人工関節置換。 知り合いに健常者アーチェリーに誘われ、アーチェリーを始めた。その後、障害者アーチェリーを知り、厚生労働大臣杯、アジアパラに出場。 現在は、障害者アーチェリー連盟の理事・強化担当。
競技基本情報	競技 アーチェリー クラス分け STクラス 競技成績 2010 アジアパラ（下位入賞）、2004 ジャパンパラ（上位入賞）2006 厚生労働大臣杯（優勝） 競技開始年齢 29歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯：原因はわからないが、バレーボールの社会人クラブチームでアタックの練習中に膝を捻ってから調子が悪くなった。1年後に病院でレントゲンを撮った際に腫瘍が見つかり、人工関節置換術を行った。退院後、会社の知り合いに「アーチェリーを始めませんか」と誘いを受け、障害のない人たちのグループでアーチェリーを始めた。その後、パラリンピックにアーチェリーがあることを知った。個人競技は始めてだったが、打つ時は真剣、終わったら笑顔で会話するオン・オフの切り替えが面白いなと思い、やってみようと思った。地元アーチェリーチーム（健常者）が練習する工務店の倉庫で練習を行い、近隣の高校のアーチェリー部OBから指導を受けた。 始めた場所：地元の工務店の倉庫 重要な他者：会社の知り合い
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・	退院してすぐに、会社の知り合いに「アーチェリーを始めませんか」と誘いを受けたことがきっかけとなり、障害のない人たちのグループでアーチェリーを始めた。三重県でトップレベルの選手と一緒に練習をしていたことが、競技レベルの向上や意識に影響した。アーチェリーを始め

条件	<p>てから、パラリンピックにアーチェリーがあることを知った。2004年、34歳の時に民間から役所へ転職し、練習を十分に行える環境になった。身近に練習できる環境や指導者がいたことも影響している。</p>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<p>小学生の頃は野球、中学・高校、社会人ではバレーボールを行っており、スポーツが好きだったこと、退院してすぐのタイミングでアーチェリーに誘われ、体験する行動力、実際に体験して面白いと感じたことが影響している。</p>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>継続状況：2012年ロンドン大会以降、クラス分けが厳しくなり、自分の障害がクラス分けから外された。そのため、パラリンピックを目指すことができなくなった。現在は、一般のクラブと障害者のクラブに所属している。障害者アーチェリー連盟では、理事・強化を担当している。世界大会等に監督として帯同したり、年に数回行われる合宿に行く。国内で行われるイベントや体験会の準備や運営を行うこともある。家族は選手だった頃からずっと支えてくれている。</p> <p>主な実施場所：総合福祉センター、高校</p> <p>重要な他者：家族、クラブの仲間</p>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>アーチェリーを始めるにあたっては、周りの支援や環境、道具が重要である。</p> <p>身近にアーチェリーができる環境があったこと、家族が応援してくれたことは、選手を続けていく上でプラスに作用していた。</p> <p>継続するためには、サポートする周りのチームや人とのつながりが一番大切だと思う。アーチェリーの特性として、障害のある人もない人も一緒にできる。</p> <p>2012年ロンドン大会以降、クラス分けの見直しやクラスの統合が進み、パラリンピックを目指すことができなくなった。現在は、理事・強化を担当している。選手の頃から理事をしていたこと、2016年リオ大会の最終枠取りの大会の際に監督として帯同したことが影響している。</p>
今後のスポーツ実施	<ul style="list-style-type: none"> ・パラリンピックで監督として帯同。 ・一般のクラブと障害者のクラブに所属し、アーチェリーを継続。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・28歳の時に腫瘍が見つかり、人工関節置換術を行った。 ・退院後、会社の知り合いに「アーチェリーを始めませんか」と誘いを

	<p>受け、障害のない人たちのグループでアーチェリーを始めた。</p> <ul style="list-style-type: none">• 地元アーチェリーチーム（健常者）が練習する工務店の倉庫で練習を行い、近隣の高校のアーチェリー部 OB から指導を受けた。• 県でトップレベルの選手と一緒に練習をしていたことが、競技レベルの向上や意識に影響した。• 身近にアーチェリーができる環境があったこと、家族が応援してくれたことは、選手を続けていく上でプラスに作用していた。• 2012 年ロンドン大会以降、クラス分けの見直しやクラスの統合が進み、パラリンピックを目指すことができなくなった。• 現在は、理事・強化を担当している。選手の頃から理事をしていたこと、2016 年リオ大会の最終枠取りの大会の際に監督として帯同したことが影響している。
--	---

(兒玉友)

仮名 Hさん

インタビュー実施日時 場所 2019年10月21日 14:00-15:30 県総合福祉センター

インタビュー対応者 日本福祉大学スポーツ科学部 安藤佳代子

個人基本情報	居住 東海地区 生年月日 1969年 性別 男 障害発生年齢 36歳 障害内容 左上腕切断 リハビリ期間 3年程度
略歴	事故前 サラリーマン (労災) 受傷後、いくつかの仕事を経て、2016年からアスリート雇用。
競技基本情報	競技 ゴルフ、陸上 (砲丸投げ)、射撃、アーチェリー クラス分け 射撃 SH2→義手をつけてSH1のクラスで出場している 競技成績 2019年 Al Ain 2019 World Shooting Para Sport World Cup 50mP60MW-SH1 出場、2018年 第30回全日本障害者ライフル射撃競技選手権大会 上位入賞 競技開始年齢 36歳～ゴルフ、47歳～陸上、射撃、49歳～アーチェリー
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯：①勤務時の事故により左上腕部から片腕を失う。受傷後3ヶ月後に、他の病院に転院。転院先の病院は看護師をしていた妹が探してきた。その病院にはスポーツ医学センターがあり、先生より体を動かした方が良いとスポーツを勧められた。T大学名誉教授のT先生が以前私がゴルフを行っていたことを知ったことから、片腕のゴルフを勧められ、T先生からF先生にできるようにトレーニングするよう指示、転院して1ヶ月後くらいからゴルフをやることになった。退院して、プロゴルファーの辻村暢大プロに指導を受けることになる。5月に受傷して、翌年の2月の終わりに障害者ゴルフ大会にエントリー。その際に別の片腕ゴルファーのレベルの高さを目の当たりにする。受傷して5年後くらいのこと、障害者ゴルフ協会のアメリカ遠征でゴルフ用義手を使っているアメリカ人と出会い、自分のゴルフ専用義手を製作してもらうことに。日本での義肢の調整は松本義肢へ依頼し、その後義手を使用していくつもの大会へ出場する。2009年くらいまでゴルフ競技へ集中していた（その後仕事復帰し仕事に専念する日々）。 経緯②他の病院のスポーツ医学センターK先生からの勧めにより、2016年長居陸上競技場での人材発掘事業に参加。ゴルフはパラリンピックの

キャリア調査

	<p>種目になっていないので別の種目をしてはどうかと勧められたことがきっかけ。発掘事業で投擲を体験、時間が余ったのでその時に射撃を体験した。砲丸種目は地元中学生と一緒に練習し大会へ出場。発掘事業から1ヶ月後、日本障害者スポーツ射撃連盟に電話して競技をしたい意思を伝える。すぐに銃を所持するための試験を受けて1回で合格し許可証を取得。初期費用は80万円くらいかかった。海外の射撃選手は、アーチェリーも実施していることが多いため、3ヶ月前くらいからアーチェリーも始める。アーチェリーは1回大会へ出場した。</p> <p>始めた場所：①ゴルフ練習場・ゴルフ場 始めた場所：②発掘事業→県内の射撃場</p> <p>重要な他者：①他の病院のスポーツ医学センターF先生、T先生、妹（看護師） 重要な他者：②他の病院のスポーツ医学センターK先生、妻</p>
<p>障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>① 転院先がスポーツを専門にトレーニング・指導できる環境であった。 →良い指導者にすぐに巡り合うことができた。 →I氏の行動力が様々な種目を実施する大きな要因。</p> <p>② 東京パラリンピック開催により実施された、発掘事業に参加することが機会となった。</p>
<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校では特定の種目はせずに、様々なスポーツを経験。小学校3年生～中学校1年生まで空手。中学・高校とバレーボール部。バレーボールは両親の影響で選択した。両親の影響で、幼少期からスポーツは大好きであったこと、受傷前にゴルフを行っていたことが受傷後すぐにゴルフを勧められ（実施）することに。 ・母親の弟がクレー射撃を行っていたことで、射撃は遠い競技ではなかった。
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>継続状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ・労災で継続的な資金が得られている。 ・射撃は練習するためかなりの費用がかかる。 ・家族の支えがあったこと。 ・2017年から強化指定選手に選ばれ国際大会に出場。 <p>主な実施場所：②県内の射撃場</p> <p>重要な他者：妻、病院のスポーツ医学センターK先生</p>

スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> ・労災であったことも継続する上での金銭的な部分は大きかった。 ・人との出会いとつながり（良い指導者に巡り合うことができたこと）。
今後のスポーツ実施	<ul style="list-style-type: none"> ・パラリンピック出場が目標。 ・2018年フランスワールドカップで監督として参加した。選手でなくても監督として行くこともできればと思っている。 ・2020年東京大会以降がどうなるか不安（パラリンピックバブル）。 ・日本障害者スポーツ射撃連盟の存続ができるように努力したい
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・家族がスポーツ一家であったことから、幼児期からスポーツに親しんでいた環境にあった。→体力レベルが高く、スポーツセンスの能力が備わる。 ・転院した病院にスポーツ医学センターや専門家が揃っていたことから、受傷後すぐにスポーツを行うことができたこと、専門家からの指導を現在も継続的に受けていることから、初めの転院先の選択がその後のスポーツ活動へ非常に大きな影響を及ぼしている。 ・I氏個人のバイタリティー、行動力がある。人とのつながりを重要にしている点や、専門家からの勧めなどを受け止め、即行動・実行する能力が備わっている。 ・2020年東京大会以降は、選手か監督としてパラリンピックに出場を目指す、それ以降の競技団体の運営がどうなるか心配している。

(安藤佳代子)

仮名 Iさん

インタビュー実施日時 場所 2019年9月9日9:30-11:00 県町役場総合支所

インタビュー対応者 日本福祉大学スポーツ科学部 児玉友

個人基本情報	<p>居住 東海地区 生年月日 1971年 性別 男</p> <p>障害発生年齢 21歳 障害内容 脊髄損傷 リハビリ期間 2年</p>
略歴	<p>高校卒業後に県外に就職し、受傷後、現在の職場に就職</p> <p>車に同乗中の事故により脊髄損傷</p> <p>小学校低学年の頃から水泳を始め、高校総体や国体に出場</p> <p>障害発生後はリハビリとして水泳を始めた</p>
競技基本情報	<p>競技 水泳 クラス分け 運動機能障害S7</p> <p>競技成績 2000年パラリンピックシドニー大会（下位入賞）、2004年パラリンピックアテネ大会（下位入賞）</p> <p>競技開始年齢 23歳頃（小学校低学年の頃から水泳を始めている）</p>
障害発生から障害者スポーツ開始まで	<p>経緯：21歳の時、車に同乗中の事故により脊髄損傷。リハビリ期間は約2年。退院後、体力をつけるためのリハビリを目的とした水泳を始めた。その頃、アトランタパラリンピックが行われており、パラ水泳の選手の活躍をたまたまテレビで観たこと、友人ら（水泳仲間）からの勧めで、シドニーパラリンピックを目指すことにした。近県で理学療法士をしている後輩からの障害者スポーツに関する情報をきっかけに、地域ブロック障害者水泳大会に出場し、その後ジャパンパラ等へ出場した。</p> <p>始めた場所：地元のスイミングクラブ（父親が所属している水泳協会が運営）</p> <p>重要な他者：水泳仲間（友人）</p>
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>アトランタパラリンピックでパラ水泳の選手の活躍を友人ら（水泳仲間）と観てパラ水泳を勧められたこと、理学療法士をしている友人から障害者スポーツに関する情報提供を受けたことがパラ水泳を始めるきっかけとなっている。</p> <p>地域ブロック障害者水泳大会では、障害のある選手らの前向きに明るく水泳に取り組む姿をみて刺激を受けた。障害を受け入れるきっかけとなった。</p> <p>地元で父親が所属している水泳協会が運営するスイミングクラブがあり、父親も指導に関わっていたため、身近に練習できる環境があった。</p>

<p>受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響</p>	<p>小学校低学年の頃から父親の影響で水泳を始め、高校総体や国体に出場している。リハビリとしての運動を考えた際に水泳を選択したことは、これまでの水泳経験が影響している。また、近くに父親が所属している水泳協会が運営するスイミングクラブがあったこともプラスに作用している。</p>
<p>障害者スポーツ継続に関する状況</p>	<p>継続状況：現在は週 4～5 日、父親が所属している水泳協会が運営するスイミングクラブで、子どもたちに水泳指導をしつつ自分の練習を行っている。2 年ほど前にオープンした健康センターのプールを利用している。このプールはバリアフリー仕様のプールだが、以前利用していたプールは階段が多く、杖で移動していた。また、去年から県からの助成金を受けている。</p> <p>障害のある中学生が水泳部に入ってきて、地域ブロック障害者水泳大会に誘った。その中学生は現在は大学へ進学しているが、大会に出る際は応援に行く。全国障害者スポーツ大会への出場経験がある。</p> <p>子どもや甥っ子が水泳をしており、甥っ子がインカレに出場するため応援に行った。頑張っている姿をみると負けられないと思う。</p> <p>主な実施場所：父親が所属している水泳協会が運営するスイミングクラブ</p> <p>重要な他者：受傷前から一緒に水泳をしてきた友人、仲間、先輩後輩。家族の支えも大きい。</p>
<p>スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件</p>	<p>水泳仲間をはじめ、子どもや甥っ子が水泳で頑張っている姿をみると負けられないと思う。</p> <p>2 年程前に新しくプールができ、地元で日本選手権が開催され、2020 年東京大会開催決定の影響も大きい。</p>
<p>今後のスポーツ実施</p>	<p>2020 年東京大会に向けて取り組むこと。一般の大会も含め、引き続きコーチとして選手として水泳を継続する予定である。</p> <p>続けやすく、来て楽しいと思う環境が大切だと思う。そして、周りから「速くなった」「泳げるようになった」など嬉しいと感じる、前向きに考えられるような環境も重要だと感じている。</p>
<p>まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校低学年の頃から水泳を始め、高校総体や国体に出場していた。 ・受傷後、水泳を始めるにあたっては、1996 年アトランタ大会でパラ

	<p>水泳の選手の活躍を友人ら（水泳仲間）と見てパラ水泳を勧められたことがきっかけとなった。</p> <ul style="list-style-type: none">• 理学療法士をしている友人からの障害者スポーツ等に関する情報提供をきっかけに、パラ水泳大会に出場。• 近くに父親が所属している水泳協会が運営するスイミングクラブがあり、継続しやすい環境であった。• 水泳仲間をはじめ、子どもや甥っ子が水泳で頑張っている姿をみると負けられないと思う。• 2年程前に新しくプールができ、地元で日本選手権が開催され、2020年東京大会開催決定の影響も大きい。• 受傷前のスポーツ経験は受傷後スポーツを始める際にはプラスに作用していた。
--	--

(兒玉友)